

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K06277

研究課題名（和文）ポスト人口転換期における「農的」自然の資源管理問題

研究課題名（英文）Research on the management of natural resources in rural communities in a society with a declining population

研究代表者

藤村 美穂 (Fujimura, Miho)

佐賀大学・農学部・教授

研究者番号：60301355

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、隣接処分やの視点もとりいれながら、まず農的自然についての概念整理を行った。そして、ポスト人口転換期における農的自然に、現在、誰がどのようにかかわっているのかについて、まず、干潟の資源利用に焦点をあてた研究をおこなった。有明海の半農半漁村を事例とし、漁業センサスの整理を行うとともに漁協ごとに聞き取り調査をおこない、農的自然（干潟や堀や水路など）の利用の変化とそれをめぐる社会関係について調査した。農村や中山間地については、とくに「食」をめぐる都市部との人間関係に焦点をあてた聞き取り調査を行った。成果は、シンポジウム、地元での講演、著書として著した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

農山村の資源利用や管理については、生業やそれをとりまく社会経済状況という点から論じられることが多い。それに対して、本研究は、農山漁村で生活する者の視点、すなわち、食や健康に関する態度、生計戦略、地域内外の人との自然の利用を介した交流という視点から調査を行ったことに特徴がある。このような方法でみえてくるのは、産業としての農林漁業のほかに、日々人間関係のなかで行われている農的自然の多様で小さな数々の利用である。農山村の過疎高齢化が常態となったポスト人口転換期においては、このような複層的な利用の実態を把握しておくことは、農的自然の維持あるいは知識や文化の伝達を考える上でも重要である。

研究成果の概要（英文）： In this study, we conceptualized the concept of agro-nature as nature related to livelihood and life, while incorporating the viewpoints of adjacent disposals. Then, to find out what kinds of people is involved in agricultural nature in the post-population transition period, we first conducted a study focusing on the resource use of tidal flats. Using half-farming and half-fishing communities in the Ariake Sea as a case study, we organized the fishery census and interviewed each fishery cooperative in Ariake area to investigate changes in the use of agricultural nature (tidal flats, moats, watercanals, etc.) and the social relationships surrounding these changes. About rural and mountainous areas, we conducted interviews focusing on human relationships with urban areas, particularly with regard to "food exchange". The results were published in the form of symposiums, local lectures, and papers.

研究分野：農村社会学

キーワード：農的自然 マイナーサブシステム 有明海 都市ー農村 ポスト人口転換期

## 1. 研究開始当初の背景

「農」がつく言葉にはさまざまなものがある。そして、その多くが、産業としての農業に関連するモノやコトである。農学の視点からみれば、「農」とは、人間が自分の身体を維持し生活を営んでいくために、自分では作り出せないモノを動植物に作り出してもらうための手伝い(世話)であるということができる。すなわち、植物や動物が、人間にとって都合よくその能力を発揮し、人間が食用や道具などとしてその成果を利用しやすいようにするための環境整備である。

これに対して、少し以前から、食と農、農的暮らしなど、もう少し広く、もう少し原点に戻って「農」をとらえようという意図を込めてこの語が用いられるようになっていく。歴史や人類学の研究成果から考えると、人間にとって「農」という営みは、定住化とほぼ時を同じくして始まり、以来かたちをかえながら現在にいたるまで続いている営みである。すなわち、動ける範囲あるいは隣の集団と競合しない範囲の土地で、食物や日常生活に必要な物資を獲得し続け、生活を続けていくための環境整備でもある。農的自然とは、このような、農を中心とした生活にかかわる自然の全体のことを指している。この「農的」自然については、水源涵養や国土保全などの公的機能を有していることが評価され、世界農業遺産の創設など、社会的にも価値が見直されているが、その利用管理を担ってきた農山村については、管理能力の衰退が指摘されてきた。

1 ターンや関係人口や交流人口などとして都市の人たちが期待される場合も、そのような文脈で語られることが多い。しかし、たとえ耕作を中止するなどの場合においても、農的自然の利用方法や景観が変化していること自体をもって、管理能力の衰退ととらえてもよいのだろうか。農山漁村で生活する者の立場から考えれば、日本全体が人口減少に向かうことが常態となりはじめたポスト人口転換期においては、農的自然のあり方も変わってくることは当然なのではないか、という問題意識から本研究は、はじまっている。

## 2. 研究の目的

農村社会の研究においては、農村の環境、とくに農的自然は、経済的な基盤、あるいはそれを利用する組織や人間関係という視点から研究され、描かれることが多かった。というのも、日本においては、農村の地域社会(村落)が、自分たちがかわる農的自然を「領土」として認識し、その維持管理に大きくかかわってきたからである。本研究は、このようにして利用管理されてきた、個々の農的自然と地域社会とあり方(農的世界)やその変化を概観し、それをとおして現在の都市や農村の「農」とのかかわりがどこに向かうのか、今後、どのような可能性があるのかということについて考えることを考えたい。

本研究の具体的な目的は、ポスト人口転換期における農的自然に、現在、誰がどのようにかかわっているのかについて、統計資料などを用いて長期的な変化の動向をさぐるとともに、それには現れないような、小規模ではあるが、多数の人によって続けられてきた活動に着目した実態把握および経時的な変化の把握をおこなうことである。

## 3. 研究の方法

主要な経済と結びついた農林漁業などの活動やそれに利用される土地については、多くの研究がある。しかし、本研究で対象とするのは、その周辺も含んだ「農的自然」の全体である。したがって、調査にさきだって、これまでの調査経験や研究史をふまえて「農的自然」についての概念的整理を行った。そして、農的自然と人間とのかかわりについて把握する新たな視点を獲得するために、研究分担者の専門である人類学の視点を取り入れた議論の構築をおこなった。

具体的な調査としては、九州有明海沿岸の漁村における干潟の利用、有明海沿岸の農村における(集落や耕地に付随した)水路の利用についての調査、および、「食」のやりとりを介した都市部と農村部の人間関係についての調査をおこなった。また、新型コロナウイルスの蔓延の期間には、比較のために、代表者と分担者が以前からスリランカ人研究者らと共同でおこなってきたスリランカの農村問題についての議論をオンラインにて続けた。

## 4. 研究成果

### (1) 農的自然についての概念・調査視点の検討

農的自然について、山や草原、干潟、などのほか、動く動物(犬と獣害)、エネルギーからみた実態や現在社会学が直面する問題について整理をおこなった。例えば、山の資源利用が里山の

な利用から木材（林業）へ大きくかわり、その林業が不振にあえいでいる現在、大規模化や機械化を重視した林業政策やバイオマス事業が、山の管理の窮状を打開する救済者にはならないことを明らかにした、そして、これらの動きに疑問を感じた人びとが、日本の各地で、勉強会をつみかさね、地域社会が一体となった自伐型林業や、「現実的な」方法、すなわち搬出のコストがかからずかつ伐採の規模やスピードが生産の場における現実にあわせられるような、小規模の発電所を山元（上流部）につくる方法を模索していることなどを示した。これらの一連の論考については、「環境と農的世界 農的自然と農村の生活」として公表されている（藤村、2022）。

また、研究分担者（稲岡）は、「病む・癒す」という視点から、大きな時間的にも概念的に広い視野をもって、人と自然との関係のバランスやその乱れについてとらえようとした。例えば、心身の不調と同じように、野生動物などの自然環境との衝突（葛藤）もまた、完全にコントロールすることができないことがらである。とすれば、それらをどのように予防し、どのように納得するかということが、それぞれの社会にとっては重要なこととなってくる。このような視点から、著書が編集され、藤村はラオスや日本での調査経験から、心身の不調への対応や周囲の環境への対処について、コントロールできないものへの恐れや不安とどのように共存してきたのかを描いた。また、共同で、スリランカの獣害問題について考察をおこなった（稲岡編著、2021）。

また、本研究による狩猟活動の調査の事例について、国立民族学博物館の共同研究に参加しながら、理論形成してまとめたものとして、（藤村、2021a）がある。ここでは、ドメスティケーションの過程を、人間の側も自然の側もともに働きかけ、働きかけられながら変化していく側面、さらに人間の働きかけによって、自然と自然（この場合は狩猟の共同者であるイヌと対象であるイノシシ）も、相互の駆け引きの中で変化してゆく様を、「駆け引きすることの有効性 九州の狩猟犬の事例から」として、駆け引きという視点から示し、動植物利用の議論に新たな知見を加えることに貢献した。藤村は、この期間の関連する公表物として、環境社会学事典の「人と自然の付き合い方」に関する項目を共同編集もおこなっている。

以上は、研究機関の比較的前半に行った、代表者（農村社会学） 分担者（人類生態学）のそれぞれの専門分野の成果を融合する視点を示す試みである。スリランカについての事例調査（Anuradha ほか、2022）（Ariyawanshe I.D.K.S.D ほか、2023）は、これらの視点をさらに発展させたものであり、自然との対処に、コミュニティが集団としてたちむかうことの実践的な意味や条件を示している。

## （2） 食を媒介とした人間関係について

次に、これらの知見をふまえて、コントロールできないものへの不安の一つの例として、食と農のリスクをとりあげ、それが戦後どのようにかわってきたのかについて、農村や環境の研究との関連で検討した。

表1は、大学生やその家族、周辺で働く20代～60代の男女に、聞き取りや自由記述方式で行ったアンケートを表にしたものである。新型コロナウイルスの第7波の最中におけるアンケートであり、まだ外食が心理的にも制限されていたこともあるのか、記述内容やその組み合わせは年代や性別には関係なかった。興味深いのは、「現在の食を考えるうえで、危険やリスクがあると考えていることは何か、またその理由は何にか」を尋ねると、健康や美容などに影響を与える栄養について自己管理できない、あるいはサプリメントに頼ってしまう自分自身にたいする不安、食中毒の危険性、気候などの影響による食料不足、孤食化の進行、和食の衰退、安い輸入野菜に農薬が含まれているかもしれないリスク、国の輸入政策、価格と栄養のバランス、国の食料自給率の低さ、水の汚染などの環境問題、情報があふれて何が身体に良いかの判断がむづかしいなどがあげられたことであり、これは、スリランカや日本の獣害の例のような、死傷者や破壊の現場の経験をとおした具体的な恐怖とは異なる不安であり、「リスク」ともいえるものである。

この研究では、第二次世界体制前後から現在にいたるまでの変動の時代を生き、年下のきょうだいから始まって、夫や子、そして孫など、家族の食事に携わり続けてきた2人の女性の食のライフヒストリーをとおして、このような「普通の主婦」がどのようにリスクを感じ、どのように対処してきたのかということについて、都市と農村の食をとおした関係についての議論（ポスト農業社会論）などとの慣例で論じた（藤村、2023）。このテーマについては、農林業センサスの分析および、農産物のやりとりをとおした都市・農村関係の量的調査として、継続して分析中である。

表1. 食べること・食べるものについて気にしていること

	栄養、バランス・量	カロリー	味・おいしさ	添加物	鮮度・消費期限	産地・生産者	価格	家族や友人と食べる	その他
23～40・女	●				●		●		食中毒
23～40・男	●								サプリメントに頼らない
23～40・男	●								調理が楽なもの
23～40・女	●						●		
41～65・男	●				●	●			
41～65・男	●						●		
41～65・女	●	●	●	●		●		●	虫痔
41～65・女	●			●		●			
41～65・女	●					●			物のもの
41～65・女	●						●	●	
66～80・男	●	●	●	●	●	●			自然
80～・女 (M)	●				●	●			自然
80～・女	●					●			近所におすす分け
80～・男	●	●	●			●			食事は豊かだが、野菜は自給
学生・男	●	●				●			種類多すぎでわからない
学生・男	●		●				●		和食の衰退
学生・女	●			●		●			
学生・女	●	●		●	●	●			豚の自給率
学生・女	●					●	●		
学生・女	●		●			●			物のもの
学生・女	●	●		●	●	●		●	野菜の増加
学生・女	●			●		●			
学生・女	●	●	●				●		自分のメンタルが大切

### (3) 有明海沿岸域の農漁村調査

有明海沿岸は、かつては半農半漁村が多かった地域である。干潟の環境的特質から、干拓を繰り返さざるを得なかった地域であり、それゆえ、農的自然のなかに水路や干潟など、水に関連する多様な要素が含まれることが特徴である。

その、水と人間との関係の特徴づけているのは、水が流れてつながっているものであり、土地やその上の樹木のように分けたり固定したりすることができないということである。そして、定住して生活を営むわれわれにとって、水は少なすぎても多すぎても困るということである。このような水の性質から、恒常的に水を得るためには、水そのものではなく水へのアクセスを考えることが必要なり、そのアクセスを保証するために水の流れを絶やさないと工夫や努力が必要となる。

本研究においては、初年度より、この水に大きく関連した農的自然である、有明海の水路や干潟の、生業及び生活のなかでの意味についての調査に時間を費やしてきた。その成果は、東よか干潟塾の講師として「海苔養殖草創期の漁師たち」と題して講演（2022年）をおこなった。

また、「流域社会の現在」(藤村、2024)として、水の利用や管理が、どのような社会的なまとまりを生み出してきたのかを、歴史的な経緯とともにあきらかにした。簡単にまとめると、農業水利をとおして編成された社会的なまとまり(上流から下流へとつながる流域の水社会)のありかたが、有明海沿岸地域では、多様な取水方法(例えばアオ取水など)のために複雑なものになっていること、そして、それらがやがて、都市用水や工業用水の需要の拡大につれて、流域という範囲をこえた広がりになっていくこと、海苔養殖の発展が、水に関する社会的秩序をも変えていくことなどをあきらかにした。

また、他の多くの地域と同様、水の需要や利用のタイミングが多様化し、さらにその調整が一元的に行われるようになった現在、手間をかけ、他者に気を使いながら水を得る必要はなくなり、水の循環を意識する必要すらなくなりつつある。にもかかわらず、いま再び流域社会の形成が求められている理由のひとつとして、有明海の環境をめぐる不安や恐怖感が存在することも示した。それは、漁獲量の減少や干潟の泥の臭いなどのほかに、深刻化する洪水(都市部も含む浸水被害)など、近年つぎつぎと出てくる問題にたいして、水の量や流れをコントロールしようとしてきた結果として他の問題が生じてきたのではないかという不安感も大きいと考えられる。

以上、大きく3つに分けて研究内容について述べてきたが、成果出版物は以下のとおりである。

### (4) 上述の発表論文

- 1, 藤村美穂、2021「身体の不調に対処する—ラオス南部農村の事例」、稲岡司編、2021『病む・癒す(生態人類学は挑む SESSION 3)』、京都大学出版会
- 2, Anuradha Jayaveera, 藤村美穂、稲岡司、2021「野生の保護動物との事故—スリランカ中部乾燥地帯におけるヒト・ゾウ紛争」、稲岡司編『病む・癒す(生態人類学は挑む SESSION 3)』、京都大学出版会
- 3, 藤村美穂、2021a「駆け引きすることの有効性—九州の狩猟犬の事例から」、卯田宗平編『野生性と人類の論理: ポスト・ドメスティケーションを捉える4つの思考』、東京大学出版会
- 4, 藤村美穂、2022「環境と農的世界—農的自然と農村の生活」、山本務編『よくわかる地域社会学』、ミネルヴァ書房
- 5, Anuradha Jayaweera, Tsukasa Inaoka, Miho Fujimura, 2022, How Sri Lankan Farm Households Intend to Reduce the Risk of Developing the Chronic Kidney Disease of Unknown Cause Prevalent in Their Communities, IOP Conference Series: Earth and Environmental Science 995(1)
- 6, I. D. K. D. Ariyawanshe, Miho Fujimura, A. H. M. S. W. B. Abeyrathne, Tsuji Kazunari, 2023, Fostering ng Collective Action in a Village-Tank Cascade-Based Community in Sri Lanka: An Illusion or Reality? Sustainability
- 7, 藤村美穂・関礼子 編著、2023、「第1部 人-自然 の変容と社会: 第1章 人と自然の付き合い方」、環境社会学会編『環境社会学事典』、丸善出版
- 8, 藤村美穂、2023「ポスト農業社会の「食と農」のリスク: 食のライフヒストリーから」、社会分析 50
- 9, 牧野厚史、藤村美穂、川田美紀編著、2024、『入門 環境社会学』、学文社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Anuradha Jayaveera, Tsukasa Inaoka, Miho Fujimura	4. 巻 995
2. 論文標題 How Sri Lankan Farm Households Intend to Reduce the Risk of Developing the Chronic Kidney Disease of Unknown Cause present in Their Communities	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 IOP Conf. Series: Earth and Environmental Science	6. 最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1088/1755/1315995/012066	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 I. D. K. D. Ariyawanshe, Miho Fujimura, A. H. M. S. W. B. Abeyrathne, Tsuji Kazunari	4. 巻 22-2
2. 論文標題 Fostering Collective Action in a Village-Tank Cascade-Based Community in Sri Lanka: An Illusion or Reality?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Sustainability	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/su152015168	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 藤村美穂	4. 巻 50
2. 論文標題 ポスト農業社会の「食と農」のリスク: 食のライフヒストリーから	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会分析	6. 最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 糸山明日香・藤村美穂・藤井直紀・Ahumad
2. 発表標題 有明海のノリ養殖開始時における漁業者の対応とその変遷
3. 学会等名 汽水域シンポジウム
4. 発表年 2022年

## 〔図書〕 計5件

1. 著者名 藤村美穂（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 343
3. 書名 『生態人類学は挑む 病む・癒す』	

1. 著者名 稲岡司（編著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 343
3. 書名 『生態人類学は挑む 病む・癒す』	

1. 著者名 藤村美穂（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 400
3. 書名 野生性と人類の論理 ポスト・ドメスティケーションを捉える4つの思考	

1. 著者名 藤村美穂（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 242
3. 書名 よくわかる地域社会学	

1. 著者名 牧野厚史、藤村美穂、川田美紀（編著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 216
3. 書名 入門 環境社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	稲岡 司  (Inaoka Tsukasa)  (60176386)	佐賀大学・農学部・名誉教授   (17201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------